

記憶の場所 平和の橋

— 侵華日軍南京大屠殺遭難同胞紀念館の発展の道 —

王 鶴

南京大屠殺史・国際平和研究院ポスドクター

はじめに

南京は中国六朝の古都であり、海のシルクロードと陸のシルクロードが交錯する唯一の都市でもある。このように豊かな歴史と現代の息吹を有する歴史的に名高い都市は82年前、空前の災難に見舞われた。1937年12月13日、日本軍は南京を占領し、また南京城内外の罪の無い平民および武器を捨てた軍人に対して無差別で野蛮な虐殺を行い、全世界を震撼させる南京大屠殺事件を引き起こした。この歴史は一人ひとりの南京市民、ひいては一人ひとりの中国人が永遠に忘れることができない悲しみの記憶となっており、また世界の人々の共通の記憶とすべきである。

私たちが平和の時代により与えられた幸せな生活を享受している今日、この痛ましい歴史を忘れてはならない。このため南京市は1985年、江東門日軍集団虐殺遺跡および遭難者合葬地に侵華日軍南京大屠殺遭難同胞紀念館（以下、「南京館」）を建設した。

33年間に及ぶ建設発展を経て、紀念館の敷地面積は10万3,000㎡、建築面積は5万7,000㎡、展示面積は2万㎡に達し、暴行・戦い・勝利・裁判・平和の5大テーマが集まった一体型の総合紀念館である。現在、中国国内外から毎年延べ800万人に及ぶ入館者を受け入れており、すでに歴史を刻み平和を維持する重要な記念すべき地となっている。

1. 歴史の真相を守る「記憶の場所」

日本の文部省は1982年初夏、侵略の歴史を改ざんした教科書を検定に合格させた。これは中国を含む過去の戦争による侵略被害を甚大に受けた市民およびその家族にとっては外ならぬ二次被害であり、アジアの各被害国およびその人々の強い反対に遭った。南京大屠殺事件の生存者・研究者を含む多くの南京市民の呼びかけのもと、「南京館」は正式に開放されることになった。南京市は2014年、旧利濟巷慰安所旧址を文化遺産保護区域に加え、またこれをもとに南京館分館という名義で陳列館の方式により一般公開した。この旧跡は現在、保存状態が最も完全なアジア最大の「慰安婦」に関する旧跡でもある。

設立当初より、「南京館」は歴史の真相を守り、反戦と平和の意思を伝える使命を担っている。82年の時が過ぎた今、この歴史はすでに当時の経験者個人の記憶から集団の記憶へと移り変わり、再び都市の記憶・国の記憶さらには世界の記憶になりつつある。南京大屠殺事件の歴史はすでに、世界規模の人々がますます知るところとなっている。「記憶の場所」としての南京館は、この歴史の真相を守り、この歴史の記憶を見守り、そして伝えるが使命である。

長年の間、「南京館」と南京地区の研究者は相次いで、中国・日本・アメリカ・イギリス・ドイツなどの複数の国と地区において、中国側・日本側およ

び第三者の大量の保管文書・史料や歴史写真を広く募り、南京大虐殺事件に関わった中国侵攻日本軍の老兵、当時南京に残り難民を救助し日本軍暴行の記録をつけた第三者の外国人、および中国側被害者を含む大量の文化財・写真・保存資料・映像などの資料を集めた。中国国内外の研究者は、その資料の分類・整理と踏み込んだ研究をめぐり、多くの成果を『南京大虐殺史料集』（72巻）、『南京大虐殺史研究と文献シリーズ叢書』（36巻）、『南京大虐殺史』・『南京大虐殺全史』などで出版した。これらの貴重な資料は、史学研究の実証となるほか、この歴史を多くの人々に広める重要な基盤ともなる。

さらに「南京館」では、33年にわたり、被害を受けた生存者の大量の口述資料を保護してきた。1984年の南京館建築当初、早くも南京市は市全体の500数万人に対し一斉調査を行い、1,756名の南京大虐殺の生存者を見つけ出した。その後、1991年と1997年に一斉調査と訪問調査を再度行い、さらに2016年、南京大学歴史学部の学生と共に、健在であった最後の生存者に対して口述資料の収集を行い、『変えさせられた人生』という本にまとめ出版した。

江蘇省と南京市は1994年12月13日、「南京館」において大虐殺の殉難者に対し追悼式典を行い、南京市は中国初の民衆集会方式を以って戦争中に殉難した同胞を追悼する都市にもなった。その後、毎年この特別な日には、式典の形で戦争犠牲者・遭難者に対し追悼集会を行うのが慣例となった。中国は2014年に立法を可決し、12月13日を南京大虐殺殉難者国家追悼日とした。それから、毎年、国家追悼日には、南京大虐殺殉難者国家追悼式典が「南京館」内において行われ、厳かでしめやかな追悼式典では「平和宣言」の朗読や平和の鐘を鳴らしたり、平和の象徴の鳩を放ったりするなどの活動を通じて殉難者に対する追悼を表し、平和を祈念している。

ここ数年、「南京館」も記念館という枠を超える試みをしており、インターネットとニューメディアの力を借り、より広い範囲と空間に向けてこの歴史の記憶を表現している。今年の国家追悼日の活動を例にとると、「南京館」が主宰した国家追悼テーマ

のネット閲覧数は15億6,000万回に達し、「南京館」の公式微博（ウェイボー）だけでも、追悼日当日の総閲覧数は1億3,300万回に達した。「新浪江蘇」（Sina Jiangsu）と共同主宰した「国家追悼日」のテーマは76億回に達した。1,913万を超える人々がネットにコメントを残す形で追悼活動に参加した。

南京大虐殺事件の生存者の李秀英さんは、「歴史を記憶すべきであり、憎しみを記憶してはならない」と述べている。この歴史の記憶を伝えて保存するのは、世の中の人に南京大虐殺事件というこの人類共通の警告意義を有する遺産を理解させ、悲劇が再び繰り返されることを防ぎ、東アジア地区ひいては世界の平和を守るためである。

2. 平和を守る「平和の橋」

第二次世界大戦中に多大な戦争の痛みを経験した都市として、南京はとりわけ平和の尊さを理解している。そして「南京館」は南京市のランドマークとして、「平和都市」という肩書の構築に努めており、長年の取り組みを経て、南京市は2017年8月31日、世界で169番目、中国で初めて平和都市となった。

2002年12月13日の南京大虐殺殉難者追悼式典では、初めて市民が南京都市「平和宣言」を読み上げ「南京平和集会」の開催が追加された。「南京館」では毎年8月15日、日中両国の国民が参加する「南京国際平和集会」が行われる。「南京館」は2007年、増築を経て新たに对外开放され、増築された全体設計のレイアウトは「平和の舟」をモチーフに、平和のテーマを再度強調した。

「南京館」は「紫金草」を平和のシンボルとして対外に発表した。日本軍医の山口誠太郎は1939年春、南京の紫金山の麓でこの小さな花を見つけ、その種を日本に持ち帰り広く栽培した。戦後、山口氏は反戦と平和のために取り組み、常に奔走していた。紫金草は今では、すでに南京が追求する平和の象徴となっている。私たちは「紫金草国際平和学校」を創設した。専門的な研修カリキュラムと学習クラス

を通じて、中国で学ぶ外国人留学生に南京大虐殺事件の歴史を理解してもらい、また海外留学する予定の中国人学生にもここを訪れ平和教育を受けてもらっている。現時点ですでにドイツ・ノルウェー・オーストラリア・ザンビア共和国など20カ国を超える国と地域から500数名の青少年がここを訪れ卒業し、「平和の小さな使者」の証書を受け取った。第11期「紫金草平和教室」と第9期「紫金草読書会」活動を行い、一般市民向けに歴史を語り、歴史学者の指導の下、若者に歴史を理解してもらい、平和の声を伝えている。

「南京館」は自身が架け橋として積極的に世界平和を愛する人々および団体と互いの平和理念を交わし、互いの平和の声を伝えている。日本の歴史学者である笠原十九司氏（都留文科大学文学部名誉教授）、井上清氏（京都大学名誉教授）、吉田裕氏（一橋大学名誉教授）らと学術連携を構築することも含め、反戦を訴える松岡環氏、勇敢に日本軍の暴行をあばいた老兵の東史郎氏などの方々に南京館を訪問するよう招聘し、活動を行っている。私たちはまた来訪された海外の友好団体と交流を行っている。これらの団体には、30数年間に渡って南京を訪問し「緑の贖罪」活動を行っている「日本南京大虐殺被害者追悼植樹訪中団」、アジアの戦争被害者を深く心に刻み付ける「日本銘心会訪問団」、また私たちと共同で「東アジア平和の新ビジョン」対話会を行い、「南京コンセンサス」を発表した日本平和学会、東アジアの共同歴史認識を達成するための韓国NPO団体「アジアの平和と歴史教育連帯」、戦争中の女性暴力に対して特に記憶することに注目している日本の市民団体「わたしの戦争と平和資料館(wam)」、および「子供と教科書全国ネット」などがある。これらの個人および団体との交流活動により、私たちのお互いの理解が深まり、私たちの貴重な記憶となり、中国・日本・韓国の三カ国の民間がお互いの理解を推し進め、コンセンサスを増進し、平和を守る希望と光を見せてくれている。

2016年の熊本地震発生後、私たちは記念館名義で微博（ウェイボー）上に慰問ツイートし、日中の人々の注目を集め、建設的な評価を引き起こした。

2017年の四川地震発生時には、日本側からの善良な祈りもツイートし、このような人々のお互いの信頼を増進する良い影響は、日中双方の民間交流の常態となるのが当然である。「南京館」は2002年に、南京で最初の日中韓三カ国「歴史認識と東アジア平和フォーラム」が開催され、現在までにすでに17回開かれたこの交流活動は東アジア三カ国の民間の歴史と現実問題における相互理解およびお互いのコミュニケーションを大いに促進し、またこれにより東アジアの平和を守るコンセンサスに達した。私たちはその中の一員として、今後さらに努力して積極的な役割を果たしていく。

おわりに

私たちは伝承・歴史を守る「記憶の場所」としてだけでなく、また中国国内外の交流の促進と東アジアの和解を推し進める「平和の橋」として、今後の道において、アジアの他の平和博物館を含む関係者と共に手を携え、東アジア各国の人々の和解とアジアの平和事業を推し進めることを願っている。国際的な言語を用い、より客観的な態度でこの歴史の記憶を伝え、さらに積極的な姿勢で未来に目を向けていきたいと考える。

记忆之所 和平之桥

侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆的发展之路

王 鹤

南京大屠杀史与国际和平研究院 博士后

南京是中国六朝古都，也是唯一集聚了海上丝绸之路和陆上丝绸之路的城市。这样一座具有历史意蕴与现代气息的历史名城，在 81 年前却遭受空前的劫难。1937 年 12 月 13 日，日军侵占南京，并对城内外无辜平民和放下武器的军人实施了无差别的野蛮屠杀，制造了举世震惊的南京大屠杀惨案。这段历史成为每一个南京人，甚至每一个中国人永远无法忘记的伤痛记忆，也应该成为世界人民的一份共同记忆。

今天，当我们在享受和平年代赋予的幸福生活时，我们不应该忘记这段惨痛的历史。因此，南京市于 1985 年在江东门日军集体屠杀遗址暨遇难者丛葬地上兴建了侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆（下简称“南京馆”）。

经过 33 年的建设发展，场馆占地面积 10.3 万平方米，建筑面积 5.7 万平方米，展陈面积达 2 万平方米，成为集暴行、抗争、胜利、审判、和平五大主题为一体的综合性纪念馆。现每年接待中外观众 800 万人次左右，已成为铭记历史、维护和平的重要纪念地。

一、维护历史真相的“记忆之所”

1982 年初夏，日本文部省审订通过篡改侵略历史的教科书，对包括中国在内曾在战争中深受侵略之害的民众及其家庭来说，这无异于二次伤害，遭到亚洲各受害国及其人民的强烈反对。在包括南京大屠杀幸存者、专家学者在内的广大南京人民的呼吁下，“南京馆”正式建成开放。2014 年，南京市将原

利济巷慰安所旧址列为文物保护单位并在此基础以“南京馆分馆名义及”陈列馆的方式对外开放，该旧址是目前亚洲最大的、也是保存最完整的“慰安妇”旧址。

从成立之初，“南京馆”就担负着维护历史真相并传播反战与和平思想的使命。81 年过去了，这段历史已经从当时经历者的个体记忆演变为集体记忆，再逐渐成为城市记忆、国家记忆以至世界记忆。南京大屠杀历史已越来越为世界范围内的人所了解。“南京馆”作为一个“记忆之所”，其使命就是维护这段历史真相，并守护和传承这段历史记忆。

多年来，“南京馆”与南京地区的专家学者先后在中国、日本、美国、英国、德国等多个国家和地区，广泛征集中方、日方和第三方的大量档案、史料和历史图片，汇集了包括参与南京大屠杀的侵华日军老兵、当年留在南京救助难民并记录日军暴行的第三方外籍人士，以及中方受害者的大量文物、照片、档案、影像等资料。国内外学者围绕其开展系统梳理与深入研究，出版了大批研究成果，如《南京大屠杀史料集》（72 卷）、《南京大屠杀史研究与文献系列丛书》（36 卷）、《南京大屠杀史》、《南京大屠杀全史》等。这些珍贵的资料不仅成为史学研究的实证，更是对这段历史进行大众化传播的重要基础。

33 年来，“南京馆”还抢救性保护了大量受害幸存者的口述资料。早在 1984 年建馆之初，南京就对全市 500 多万人进行了普查，找到 1756 名南京大屠杀幸存者。此后又于 1991 年和 1997 年进行了再次普查和回访调查，2016 年“南京馆”又与南京大学历

史学院学生对健在的最后一批幸存者进行口述史采集并结集出版《被改变的人生》。

1994年12月13日，江苏省和南京市在“南京馆”举行了对大屠杀死难者的悼念活动，南京也成为中国第一座以民众集会方式悼念战争期间死难同胞的城市。此后每年的这一特殊日子，都以仪式化方式对战争牺牲者、遇难者进行集会悼念并成为惯例。2014年中国通过立法，将12月13日设立为南京大屠杀死难者国家公祭日。此后，在每年的国家公祭日里，“南京馆”内都要举行南京大屠杀死难者国家公祭仪式，在庄严肃穆的悼念仪式上，通过诵读《和平宣言》、敲响和平大钟、放飞和平鸽等活动来表达对死难者的悼念，对和平的祝愿。

近几年，“南京馆”也在尝试突破场馆的空间局限，借助互联网与新媒体向更广的范围和空间呈现这段历史记忆。以今年的国家公祭日活动为例，“南京馆”主持的国家公祭话题的网络阅读量达到15.6亿，仅“南京馆”官方微博（Sina Twitter）在公祭日的阅读量总数就达到了1.33亿。与“新浪江苏”（Sina Jiangsu）联合主持的“国家公祭日”话题达到76亿。超过1913万人通过网上留言方式参与祭奠活动。

南京大屠杀幸存者李秀英说：“要记住历史，不要记住仇恨”。传播和保存这段历史记忆是为了让世人了解南京大屠杀这段具有人类共同警示意义的遗产，防止悲剧重演，维护东亚地区乃至世界的和平。

二、维护和平的“和平之桥”

作为在第二次世界大战中经历过巨大战争伤痛的城市，南京尤其懂得和平的珍贵。而“南京馆”作为南京市的地标，也在努力打造“和平城市”的名片，经过多年努力，2017年8月31日，南京成为世界第169座、中国首座国际和平城市。

早在2002年12月13日的南京大屠杀死难者悼念仪式上，首次出现了由市民宣读的南京城市《和平宣言》，增加了“南京和平集会”的主题。每年的8月15日，“南京馆”都要举办由中日两国民众参与的“南京国际和平集会”。2007年，“南京馆”经扩建后重新对外开放，此次扩建的总体设计布局以“和

平之舟”为造型，再次凸显了和平主题。

“南京馆”对外推出“紫金草”和平符号。1939年春天，日本军医山口诚太郎在南京紫金山下发现了这种小花并将草种带回了日本，在日本广泛种植，战后，山口先生不断奔走，为反战与和平而努力。如今，紫金草已成为南京追求和平的象征。我们开办了“紫金草国际和平学校”，通过开设专门的训练营课程和学习班，让在中国学习的外国留学生了解南京大屠杀历史，让即将出国留学的中国学生来此接受和平教育。截至目前为止已有来自德国、挪威、澳大利亚、赞比亚等超过20个国家和地区500多名青少年从这里毕业并领取“和平小使者”证书。举办了11期“紫金草和平讲堂”和9期“紫金草读书会”活动，以面向公众的形式来讲述历史，在历史学专家带动下让青年了解历史，表达和平心声。

“南京馆”以自身作为桥梁，积极同国际上爱好和平的人士及团体交流彼此的和平理念、传播彼此的和平声音。包括同日本历史学家笠原十九司教授、井上清教授、吉田裕教授等建立学术联系，邀请为反战发声的松冈环女士、勇敢揭露日军暴行的老兵东史郎等人士来馆访问或举办活动。我们还同来访的国外友好团体展开互动，这些团体有：30多年始终如一来南京举行“绿的赎罪”活动的“日本南京大屠杀受害者追悼献植访华团”，有将亚洲战争受害者铭记于心的“日本铭心会访问团”，也有与我们共同举办“东亚和平的新愿景”对话会并发布“南京共识”的日本和平学会，为了达成东亚共同历史认知的韩国NPO团体“亚洲和平和历史教育连带”，有关注战争期间对女性暴力进行特别记忆的日本市民运动团体“妇女的战争与和平资料馆”与“儿童和教科书全国网”等。同这些个人和团体的交流活动加深了我们彼此的理解，成为了我们珍贵的记忆，也让我们看到了中、日、韩三国民间推动彼此了解、增进共识、维护和平的希望与曙光。

2016年日本熊本县地震发生后，我们以纪念馆名义发出一条慰问微博（Sina Twitter），引起中日民众的关注与积极评价，而在2017年四川地震发生时，我们也转发了来自日本方面的良好祝愿，这种增进民众互信的良性互动理应成为中日双边民间交流的一种常态。自2002年“南京馆”首创并在南京首度召开

中日韩三国“历史认知与东亚和平论坛”以来，迄今已成功举办17届，这一交流活动很好的促进了东亚三国民间在历史与现实问题上的相互理解和彼此沟通，并以此达成维护东亚和平的共识。我们作为其中的一份子，今后将更加努力的在其中发挥着积极的作用。

结语

无论是作为传承、保护历史的“记忆之所”，还是作为促进中外交流、推动东亚和解的“和平之桥”，在今后的道路上，我们愿同包括亚洲其他和平博物馆在内的同仁一道携手推动东亚各国民众的和解与亚洲和平事业。用国际化的语言、以更客观的态度来传播这一段历史记忆，以更积极的姿态来面向未来。